様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２７５２

研究課題名（和文）ミメティックスの文法と獲得：生成文法理論からのアプローチ

研究課題名（英文）The Grammar of Mimetics and Its Acquisition: A Generative Approach

研究代表者
村杉　恵子（斎藤恵子）（Murasugi, Keiko）

南山大学・国際教養学部・教授

研究者番号：００２３９５１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　世界の言語には普遍性がある一方「相違点」も存在する。その一つにMimetics（擬態語等）の多様性と文法がある。Mimeticsやそれを含む言語表現はどのような文法特性を示すのか。それはなぜか。
日本語の幼児言語の特徴(例：ぴーた）や、若者言葉などにみられるBinomial Adjectives （例：ふわとろな）に関する記述の基盤的題材とし、主節不定詞現象やMimeticsを語幹として選択する「な」形容詞（形容動詞）の意味的・文法的特性について分析した。その成果は、日本国内ならびに国際学会での口頭発表や国際学術ジャーナルでの出版、John Benjamins出版からの書籍などに発表された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
なぜ世界には、Mimeticsを豊かに文法に取り入れうる仕組みをもつ言語と持たない言語があるのか。本プロジェクトはその問いに対して、生成文法理論を基盤として、大人の文法、幼児の言語獲得、若者の新造語などの観点から考察し、その問いへの解明に近づいた点に意義がある。
主要部後置言語であり、膠着語である日本語において、Mimeticsが、様々な範疇の主要部の語幹として選択される特徴を体系的に示した本プロジェクトは、一見規則なく自由に作られているように見える幼児言語や若者言葉にみられる「新造語」が、多言語にも通ずる意味的特徴や普遍的な文法があることを示す点においても学術的社会的意義が見いだされる。

研究成果の概要（英文）：　Some languages are rich in mimetics, while some are not.  As Japanese is a typical language with rich mimetics, in this project, we attempt to examine the grammar governing the mimetic expressions in Japanese, based on the detailed descriptive studies of Child Japanese and the coined adjectives produced by young Japanese speakers.
We examined the semantic and syntactic properties of the root infinitive analogues and binomial adjectives, and we examine the grammatical principles governing them. We argue that the head-final agglutinative languages allow mimetics to be selected to be the stem by the syntactic heads. The research was reported in international conferences, international journal (e.g., Morphology), and a book published by John Benjamins company.

研究分野：Linguistics　(Syntax, Psycholinguistics)

キーワード：Mimetics　Adjecctival Verbs　Adjectival Nouns　Binomial Adjectives　Agglutinative language　head-final language　Root Infinitives

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

生成文法理論は、音と意味をつなぐ文法の仕組みとその普遍性について追求し、ヒトはなぜ、どのように、そしていつ、文法を獲得するのかという問いに対して理論的な説明を与えることを目的とする。一方、幼児の言語獲得の過程を詳細に観察すると、幼児の初期の言語獲得の段階には、特に主要部後置型・膠着語の特性を担う日本語において Mimetics（チンチンブー（意図：電車）・ピーた（意図：ラジオからピーと音がした））など、親を模倣した形式であるとは考えにくい発話も観察される。幼児言語に生産的にみられる Mimetics 表現は、どのように大人の文法へと「自然に」変化しうるのだろうか。

さらに、世界の言語には、Mimetics を含む表現や文法の豊かな言語と、必ずしもそうとはいえない言語が存在する。音と意味が文法を介在せずにして結びつけられているように見える Mimetics の仕組みにも言語間差異がみられるのである。それはどのようなものか。それはなぜなのだろうか。

これらの問いは、生成文法理論、類型論、音象徴や言語におけるアイコニシティに関する研究、あるいは認知言語学といった異なる背景から研究がなされている。

## ２. 研究の目的

日本語のような文法特性をもつ言語において Mimetics は、なぜ、どのように、大人の文法、幼児言語、あるいは若者言葉に「豊かに」あらわれるのか。それを検討することには、以下の二点の意義があると思われる。

第一点は、広く言語学一般への貢献として、この研究が Mimetic 表現の豊かな日本語だからこそ遂行できることにある。具体的に幼児言語や若者言葉に特徴的な「新たに造られる言語」を正確に記述し、それが大人の既存の文法とどのように連続性や共通項をもちうるのかを問うことには、記述的妥当性を満たした理論研究の追及される可能性が秘められている。

第二点は、その具体的なデータを一般化し、理論的分析を加えることは、Mimetics の関わる文法特性と類型論の解明に寄与する。他の「言語」（方言）の文法とも比較検討することにより、相対的普遍性と絶対的普遍性に関して理論的実証的に研究することができる。

したがって、本プロジェクトの目的は、(i)幼児言語の初期段階の発話や若者言葉の新造語において広く観察される Mimetics を含む表現は、大人の文法とどのように関係し、どのような連続性や共通項をもつのか。さらに、(ii)世界の言語を見渡すとき、Mimetics 表現や文法の豊かな言語とそうとはいえない言語が、なぜ、どのように存在しうるのかを解明することにある。

さらに本プロジェクトは、生成文法理論、類型論、音象徴や言語におけるアイコニシティの研究といった一見関係性の薄い分野を「学際的」に結ぶことをめざす。

## ３．研究の方法

生成文法理論は、研究者の母語知識に関する記述的理論的研究を、他言語（方言）に関する記述的理論的研究報告と対照的に比較することにより、その発展をみてきている。本プロジェクトも対照言語学的方法論に基づき、まず、Mimetics 表現の豊かな言語における言語現象を詳述し、そこで得られた記述的一般化を他言語の統語的・形態的・音韻的特性と比較し検討することにより、そのような一般化がなぜ得られるのかという問いに対して、理論的説明を与える。

データ収集の方法としては、コーパス（CHILDES など）、若者やインターネット上に見られる独特の表現を記述し、整理する。得られたデータについて、その頻度や特性に鑑みて一般化を抽出し、生成文法理論ならびに認知言語学を主な分析の手段として用い、理論的な説明を試みる。

## ４．研究成果

### [1] 幼児の言語獲得初期に見られる Mimetics とその文法：研究成果

CHILDES に収められた NOJI データならびに OGAWA データなどを主要なデータベースして、Mimetics の用いられた幼児の発話を整理し、生成文法理論に基づく理論的分析を施した。そのうえで、Mimetics が豊かな言語とはどのような特徴があるのか、それはなぜかを探った。

まず、親の模倣としては考えにくい Mimetics 表現のデータを記述した上で、それが世界の幼児言語に共通する特性「主節不定詞」として考えられるとする仮説を論証している。

（１）a．タイヤ　ぶんぶんった　（Tai，1;10）
　　b．ぴーた（ラジオがピーといったのをきいて）（Sumihare，1;08）

主節不定詞現象はどの言語にも観察されるという意味で興味深い。親も言わない動詞の形式を、

幼児は自ら作り上げ、それが時制を欠くという共通した特徴をどの幼児言語ももつのである。
　ただし、その形態は世界の言語を三分割する。ヨーロッパ言語のように不定詞のある言語では不定詞として、英語や中国語では裸動詞として、日本語、トルコ語、韓国語、アラビア語などの動詞語幹がそれ自体独立できないような形態的特徴をもつ言語では代理形（日本語の場合には「た」形）として、幼児の最初の動詞はあらわれる。幼児言語から発現する３種の類型は、語幹それ自体だけでは形態的に独立できないような言語において Mimetics が創造的に初期の動詞として豊かに表れうることを示唆している。
　では、ヨーロッパ言語や英語では、どのような新造語が幼児言語であらわれるのか。日本語の幼児言語の特徴と Clark(1982)などの他言語の第一言語獲得研究とを比較検討してみるとヨーロッパ言語では Denominal Verb（名詞を動詞にゼロ派生させる形式）が幼児の新造動詞として頻繁に、かつ生産的に表れることがわかる。以下はそれぞれ、英語、フランス語、ドイツ語を母語とする幼児の発話である。

（２）a.　You have to scale it first.　(2;04)
　　b.　Je peux la boutonner?　(Can I button (close, fasten) it?)(3;09)
　　c.　Leitren (to ladder) (1;11)

このような幼児言語では、日本語のように「(お茶）する」に対応する *do* などが Mimetics を選択して新造動詞を作ることはあまりない。一方の幼児日本語では、このようなゼロ派生の動詞（ほうき＞ほうきる）が観察されることはあまりない。すなわち、vP 仮説のもとで、vP の主要部ｖ（＋・－CAUSE）が「する」などの音形をもった形であらわされる言語では、Mimetics が語幹に選択されることがわかる。この特徴こそが、日本語のような言語では Mimetics を用いた動詞の生産的である所以であると考えられる。
　この仮説ならびに研究の成果は、国立国語研究所「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」(2016-2019,プロジェクトリーダー：村杉恵子）でのワークショップや 2020 年８月１６日東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット主催第六回ワークショップ」での招聘講演などにおいて口頭発表されている。また、著作としては、Murasugi (2017) “Mimetics as Japanese Root Infinitive Analogues”, Murasugi(2019) “The Structure of Mimetic Verbs and Adult Japanese“、 村杉（2019)「語彙獲得」、村杉（2020)「ラベル付けの相対的普遍性」、村杉(2022) 「幼児の言語獲得から生成文法理論へ」などにおいて報告されている。

**[2] 新造語の Binomial Adjectives に見られる Mimetics とその文法：研究成果**
　Mimetics は、幼児言語のみならず、若者言葉においても、新造語として「新たな語彙」を生成する上で中核的な役割を果たす。とりわけ、Mimetics は形容動詞の「な」(例：ふわとろなオムライス）や、形容詞の「い」(例：チャラい）などに選択されることによって、生産的に修飾形式が作られる。
　Mimetics を含むことの多い Binomial Adjectives（XY 形容詞）からは以下の６つの意味的文法的特性が抽出される。X と Y の関係が AND である場合（Synonymy Type)、BUT である場合（Antonymy Type)、出来事の順番がアイコニックにあらわれる場合(Sequence Type)、因果関係があらわされる場合(Causation Type)、強意や程度を表す場合(Degree Type)、Theme （主題）を表す項と述部の関係にある場合(First-Sister Type)などである。

（３）a.　あざかわな（あざとくてかわいい）(Synonymy Type)
　　b.　うざかわな（うざくてかわいい）(Antonymy Type)
　　c.　ふわとろな（ふわふわしてとろっとしている）(Sequence Type)
　　d.　さくうまな（さくっとしているから美味しい）(Causation Type)
　　e.　めちゃかわな（めちゃめちゃかわいい）(Degree Type)
　　f.　フッかるな（フットワークが軽い）(First-Sister Type)

Mimetics を含むことの多い Binomial Adjectives（XY 形容詞）において、X と Y の順序は、比較的厳格であり、X と Y の交替が許されない場合が多い。すなわち、YX 形容詞が許されない場合がある。たとえば、（３ｃ）の「ふわとろな」は文法的であるが、「とろふわな」は非文法的である。また、（３ｄ）の「さくうまな」のＸ（さく）とＹ（うま）は、ＹＸ「うまさくな」としてその意味をあらわすことができない。この順序が交替できないＸＹの関係には、音韻的・形態的・文法的制約が働いていると考えられる。その制約の中には、普遍的な特性として、語中では、右側の要素が主要部となるとする形態的原則や、内項のみが語の中で複合名詞をなしうる First Sister Principle などがある。若者言葉も既存の言語に在る一般的制約に従うのである。
　新造語の Binomial Adjectives に見られる Mimetics とその文法に関する一連の研究は、名古屋大学准教授秋田喜美氏と共同研究プロジェクトとして、2017 年 9 月 9 日（京都工科大学校）ならびに 2017 年 11 月 11 日（南山大学）を皮切りに、Workshop on Mimetics と題して、名古屋大学、立命館大学、明治大学、国立国語研究所、スタンフォード大学、ミネソタ大学、台湾国立大学、香港大学などから研究者が集い、多くの知見を分かち合うことから始まった。その後も、南山大学言語学研究センターでの４回にわたる（国際）ワークショップなどを含め、2023 年プ

ロジェクト終了まで対面ならびにZOOMによる研究会が重ねられた。
　この研究成果は、2018年5月5日にConference on the Language of Japanese Food (York University, Toronto, Canada) において口頭発表され、Akita and Murasugi (2019) “Innovative Bipartite Adjectives in Japanese”、 Akita and Murasugi(2020) “Binomial Adjectives in Japanese“、Akita and Murasugi (2021) “Innovative Binominal Adjectives in Japanese Food Descriptions and Beyond”などにおいて報告されている。

**[3]** Mimeticsの関わる文法のパラメター：研究成果
句の範疇をラベル付けするのは主要部である場合がある点は、世界のどの言語にも共通する統語的メカニズムとして生成文法理論ミニマリストプログラムにおいても提案されている。日本語のような膠着語においては、それぞれの主要部がその語幹に重複形のMimeticsを選択して名詞句、形容動詞句、副詞句、動詞句などを派生する点が特徴的である。

（４）a．キラキラちゃん（意図：キラキラした人）（名詞句）
　　b．キラキラな　（形容動詞句）
　　c．キラキラと　（副詞句）
　　d．キラキラする（動詞句）

また、形容詞や動詞においては、重複しないMimeticsが語幹として選択される場合もある。

（５）a．けばい　（意図：けばけばした派手な印象の）（形容詞句）
　　b．ポチる　（意図：ポチっと（ボタンを）押す）（動詞句）

若者言葉の新造語においても同様の傾向が見られる。

（６）a．ツンデレちゃん（意図：ツンツンしてるが実はデレデレ甘える人）（名詞句）
　　b．サクうまな　（形容動詞句）
　　c．サクサクと　（意図：滞りなく）（副詞句）
　　d．肩ズンする　（意図：（恋人の）肩に（自分の頭を）ズンと乗せる）（動詞句）

（７）a．チャラい　（意図：チャラチャラした）（形容詞句）
　　b．グダる　（意図：グダグダと過ごす）（動詞句）

このように主要部後置型の膠着語である日本語においては、既存の言語においても若者言葉においても、語幹としてMimeticsが主要部に選択されることで、Mimeticsは豊かにあらわれる。そのMimeticsの分布は、外来語のふるまいと同様であることから、Mimeticsの創造性は、外来語が主要部によって選択されることで生産的に様々な範疇が派生される日本語の特徴と原因を一にすると考えられる。その分析の示唆するところについては、言語獲得の視点からも、村杉（2019）「語彙獲得」においてパラレルな分析が提示されている。

（８）a.　リーダーさん（名詞句）
　　b.　スムーズな　（形容動詞句）
　　c.　スムーズに　（意図：滞りなく）（副詞句）
　　d.　メモする　（動詞句）

（９）a.　エモい　（意図：感情に訴える）（形容詞句）
　　b.　ググる　（意図：グーグルで検索する）（動詞句）

　一方、若者に生成されるBinomial Adjectivesの場合には、形容動詞と形容詞は、その生産性において非対称的である。（３）と（１０）を比較されたい。

（１０）a.　あざとかわいい（あざとくてかわいい）（Synonymy Type）
　　b.　うざかわいい（うざくてかわいい）(Antonomy Type)
　　c.　*ふわとろい（ふわふわしてとろっとしている）(Sequence Type)
　　d.　*さくうまい（さくっとしているから旨い）(Causation Type)
　　e.　めちゃかわいい（めちゃめちゃかわいい）(Degree Type)
　　f.　フッかるい（フットワークが軽い）(Incorporation Type)

出来事の順序や因果関係をアイコニックにあらわす点で複合動詞（例：殴り殺す（殴ったあとに殺す）と似た性質を担うSequence TypeとCausation Typeについては、「な」形容動詞は生産的にあらわれうる。一方、これらのタイプの「い」形容詞は（１０ｃ）や（１０ｄ）にみるように不可能なのである。
　Mimeticsを含むことの多いBinomial Adjectivesが、「な」に選択される形容動詞としては生

産的であるのに比して、「い」に選択される形容詞は生産的ではないのはなぜだろうか。本プロジェクトをしめくくる研究成果は、南山大学言語学研究センター第４回国際オノマトペワークショップ（Fourth International Workshop on Mimetics）において Murasugi and Akita (2021) “Binomial Adjectives in Japanese”として、また、同年９月１日に行われたヨーロッパ言語学会(SLE 2021:54th Annual Meeting of the Scietas Linguistica Europaea）の Iconicity in Prosaic Lexicon のワークショップにおいて Murasugi and Akita (2021) “Japanese Binomial Adjectives”として、口頭発表された。これらの口頭発表では、「な」形容動詞（「健康な」）は、「い」形容詞とは異なり（*「健康い」)、アイコニックな特性を備えており、語幹に Mimetics が選択される（「ふわふわな」*「ふわふわい」）だけではなく、語幹に文(「にゃんや、これは？なもちねこ」(意図：なんだこれは、と考えている様子のもちねこ)（＊「にゃんや、これは？いねこ」）が選択される特性について指摘し、議論を深めている。

（１１）a.一般的な形容動詞
- *siawase-{na/no/*i}* ‘be happy’
- *kenkoo-{na/no/*i}* ‘be healthy’

b. Mimetics [+iconic]
- *huwahuwa-{na/no/*i}* ‘be fluffy’
- *sokkuri-{na/no/*i}* ‘be very alike’

c. Quotations (informal) [+iconic]
- *“nan’ya kore”-{na/no /*i} motineko*
  ‘Mochineko cat, which looks like “What‘s this?”’

さらに、この考察を基盤として、生成文法理論による分析と認知言語学的分析の両面から、国際専門雑誌 *Morphology* に Akita and Murasugi (2022) “Binomial Adjective Doublets in Japanese: A Relational Morphology Account”として報告されている。

**主な参考文献**


[論文]（計４件）

① Murasugi, Keiko. 2017. The Structure of Mimetic Verbs: A Preliminary Study,” *Nanzan Linguistics* 12. 47-59.

② Akita, Kimi, and Keiko Murasugi. 2019. Innovative Bipartite Adjectives in Japanese. *Nanzan Linguistics* 14. 1-7.

③ Akita, Kimi, and Keiko Murasugi. 2021. Binominal Adjectives in Japanese. *Nanzan Linguistics* 16. 67-80.

④ Akita, Kimi, and Keiko Murasugi. 2022. Binomial Adjective Doublets in Japanese: A Relational Morphology Account. *Morphology* 32. 281-297.

[図書]（計６件）

① Murasugi, Keiko. 2017. Mimetics as the Japanese Root Infinitive Analogues.” In *Mimetics: Linguistic Analysis, Acquisition, and Translation*, eds. Noriko Iwasaki, Peter Sells, and Kimi Akita, 131-147. London: Routedge.

② 村杉恵子. 2019. 「語彙獲得」『レキシコン研究の新たなアプローチ』 岸本秀樹、影山太郎（編） 175-200. 東京：くろしお出版.

③ 村杉恵子. 2020. 「ラベル付けの相対的普遍性」『日本語研究から生成文法理論へ』斎藤衛、高橋大厚、瀧田健介、髙橋真彦、村杉恵子（編）66-88. 東京：開拓社.

④ Murasugi, Keiko. 2019. The Structure of Mimetic Verbs in Child and Adult Japanese. In *Ideophones, Mimetics and Expressiveness*, Eds. Kimi Akita and Prashant Pardeshi, 251-264. Amsterdam: John Benjamins.

⑤ Akita, Kimi, and Keiko Murasugi. 2022. Innovative Binomial Adjectives in Japanese Food Descriptions and Beyond. In *Language of Food in Japanese: Cognitive Perspectives and Beyond*, ed. Kiyoko Toratani, 111-130. Amsterdam: John Benjamins.

⑥ 村杉恵子. 2022. 「幼児の言語獲得から生成文法理論へ」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論３』小川芳樹、中山俊秀（編）329-344. 東京：開拓社.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Kimi Akita and Keiko Murasugi | ４．巻<br>32 |
| ２．論文標題<br>BInominal Adjective Doublets in Japanese: A Relational Morphology Account | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>Morphology | ６．最初と最後の頁<br>281-297 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Keiko Murasugi | ４．巻<br>37 |
| ２．論文標題<br>Parameterization in Labeling: Evidence from Child Language | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>The Liinguistic Review | ６．最初と最後の頁<br>147-172 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Keiko Murasugi | ４．巻<br>28 |
| ２．論文標題<br>The Parallel Route the Japanese- and Korean-acquiring Children Take to Attain the Adult Grammar: An Implication for the Minimalist Theory | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>Japanese and Korean Linguistics | ６．最初と最後の頁<br>3-17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Keiko Murasugi and Kimi Akita | ４．巻<br>16 |
| ２．論文標題<br>Binomial Adjectives in Japanese | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>Nanzan Linguistics | ６．最初と最後の頁<br>67-80 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>村杉恵子 | 4．巻<br>103 |
| 2．論文標題<br>伊那方言『づら』：統語的特徴に関する予備的研究 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>アカデミア文学語学編 | 6．最初と最後の頁<br>1-27 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Akita Kimi and Keiko Murasugi | 4．巻<br>14 |
| 2．論文標題<br>Innovative Bipartite Adjectives in Japanese: A Preliminary Semantic Descripion | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>Nanzan Linguistics, Nanzan | 6．最初と最後の頁<br>1-7 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Keiko Muarsugi | 4．巻<br>47 |
| 2．論文標題<br>Very Early Utterances in Child Langauge: Implications for the Minimalist Theory. | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>Tsin Hua Journal of Chinese Studies | 6．最初と最後の頁<br>351-381 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Keiko Murasugi | 4．巻<br>33/2 |
| 2．論文標題<br>Review: Rich Languages from Poor Inputs | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>English Linguistics | 6．最初と最後の頁<br>616-631 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Keiko Murasugi | 4．巻<br>12 |
| 2．論文標題<br>The Structure of Mimetic Verbs: A Preliminary Study | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>Nanzan Linguistics | 6．最初と最後の頁<br>47-59 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　3件／うち国際学会　9件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Keiko Murasugi and Kimi Akita |
| 2．発表標題<br>Japanese binomial adjectives. |
| 3．学会等名<br>SLE2021: 54th Annual Meeting of the Scietas Linguistica Europaea（国際学会） |
| 4．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>村杉恵子 |
| 2．発表標題<br>幼児の言語獲得から生成文法理論へ |
| 3．学会等名<br>東北大学（招待講演） |
| 4．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| 2．発表標題<br>Root Infinitive Analogues in Child Grammar: Evidence from Asian Languages 未設定 2021.2.19　概要（Abstract）　備考（Remarks）　Invited Speaker |
| 3．学会等名<br>2021 SMOG International Conference 2021The Society of Modern Grammar（招待講演） |
| 4．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi and Kimi Akita |
| ２．発表標題<br>Binomial Adjectives in Japanese |
| ３．学会等名<br>International Workshop on Parameters and Mimetics（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>The Parellel Route the Japanese- and Korean- acquring children Take to Attain the Adult Grammar: An Implications for the Minimalist Theory |
| ３．学会等名<br>Japanese and Korean Linguistics Conference 27 (JK 27)（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>Parametric Variations Viewed through the Acquisition of Labeling |
| ３．学会等名<br>国立国語研究所共同研究プロジェクト第６回ワークショップ（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi and Kimi Akita |
| ２．発表標題<br>Mimetic Predicates in the VP-Shell Hypothesis |
| ３．学会等名<br>International Workshop on Mimetics (Ideophone, Expressives) III（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>Language Variation in Labeling: Evidence for the Minimalist Program from Child Languages |
| ３．学会等名<br>Nanzan Workshop on the Foundatinal Issues in Linguistics and Philosophy of Language（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kimi Akita and Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>Innovative compounds in Japanese food descriptions and beyond |
| ３．学会等名<br>Conference on the Language of Japanese Food |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>Plato's Problem in Lexical Acquisition |
| ３．学会等名<br>Comparative Syntax and Language Acquisition #8 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>Murasugi: Acquisition of labeling: Evidence from a comparative study of English and East-Asian child languages |
| ３．学会等名<br>50 Years of UConn Linguistics, University of Connecticut |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>What Can Child Japanese Tell Us about Syntactic Theory and Vice Versa? |
| ３．学会等名<br>国立国語研究所共同研究プロジェクト第五回ワークショップ |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>村杉恵子 |
| ２．発表標題<br>オノマトペの類型論を目指して：第一言語獲得 |
| ３．学会等名<br>Workshop on Mimetics I |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>Acquisition of mimetics:evidence for the root infinitives |
| ３．学会等名<br>Workshop on Mimetics II:New Approaches to Old Questions（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>Parameters in labeling |
| ３．学会等名<br>Comparative Syntax and Language Acquisition #7（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Keiko Murasugi |
| ２．発表標題<br>On the acquisition of labeling |
| ３．学会等名<br>国立国語研究所共同研究プロジェクト第２回ワークショップ（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計9件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>村杉恵子（小川芳樹、中山俊秀（編集）） | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>開拓社 | ５．総ページ数<br>445 |
| ３．書名<br>コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2』（担当：幼児の言語獲得から生成文法理論へ）） | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Kimi Akita and Keiko Murasugi (edited by Kiyoko Toratani) | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>John Benjamins | ５．総ページ数<br>347 |
| ３．書名<br>The language of food in Japanese: Cognitve perspecctives and beyond (Innovative binomial adjectives in Japanese food descriptions and beyond) 担当： | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>斎藤衛、高橋大厚、瀧田健介、髙橋真彦、村杉恵子（編集） | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>開拓社 | ５．総ページ数<br>320 |
| ３．書名<br>日本語研究から生成文法理論へ | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>村杉恵子（岸本秀樹、影山太郎（編集）） | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>くろしお出版 | 5．総ページ数<br>229 |
| 3．書名<br>『レキシコン研究の新たなアプローチ』(担当部分：第8章「語彙獲得:『誤用』から見る普遍性と個別性」 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>村杉恵子（edited by Yoshiki Ogawa） | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>開拓社 | 5．総ページ数<br>464 |
| 3．書名<br>『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2』（担当：伊那方言『づら』：時制句を補部にとる認識様態のモダリティ） | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Keiko Murasugi (edieted by Kimi Akita) | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>John Benjamins | 5．総ページ数<br>325 |
| 3．書名<br>Ideophones, Mimetics and Expressives (担当：Chapter 10 “The Structure of Mimetic Verbs in Child and Adult Japanese) | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Mineharu Nakayama, Yi-ching Su, Aijun Huang、Koji Sugisaki, Keiko Murasugi, among others. | 4．発行年<br>2017年 |
| 2．出版社<br>John Benjamins | 5．総ページ数<br>286 |
| 3．書名<br>Studies in Chinese and Japanese Language Aacquisition （担当：Scrambling and Locality Constraints in Child Language) | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Keiko Murasugi (edited by Noriko Iwasaki, Peter Sells, Kimi Akita) | ４．発行年<br>2017年 |
| ２．出版社<br>Routeledge | ５．総ページ数<br>240 |
| ３．書名<br>The Grammar of Japanese Mimetics （担当：Mimetics as Japaense Root Infinitive Analogues) | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Luigi Rizzi, Mamoru Saito, Keiko Murasugi, among others | ４．発行年<br>2017年 |
| ２．出版社<br>Springer | ５．総ページ数<br>259 |
| ３．書名<br>Perspectives on the Architecture and Acquisition of Syntax | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

南山大学言語学研究センター 研究プロジェクト
http://www. ic.nanzan-u.ac.jp/LINGUISTICS/project/index.html
http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/LINGUISTICS/
南山大学 言語学研究センター
http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/LINGUISTICS/
国立国語研究所 共同研究プロジェクト　生成文法から日本語へ：統語理論と言語獲得
ps://www.ninjal.ac.jp/research/project-3/institute/syntax-acquisition/

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|